

内田百閒文学賞

受賞作品集

記憶の重さを浮かび上がらせる三作――

松浦寿輝



本体価格

1,100円(税込)

江口ちかる

「たまゆら湾」

最優秀賞

シニア向け文学賞にKが応募した小説『たまゆら湾』は、昭和30年代後半の備前市三石を舞台に、少年、明が古本店の店主、美耶子に寄せた恋心が描かれていた。屈折した思いを抱えている明は、美耶子と一緒にいる時間が心のよりどころとなる。だがある日、美耶子は町から姿を消した…。

年上の女性に対する少年の思いが、あまりにも純粹で、切なくなるほどだった。

小川 洋子 一作品集選評より

最終審査員

小川洋子

平松洋子

松浦寿輝

松本 利江

「岡山駅から」

優秀賞

岡山市内に住むチエと奥備中に住む従兄弟の昭夫と英夫は、お互いの家を行き来し、楽しい時間を過ごしていた。3人にとって岡山駅はいつも楽しみへの入り口であった。しかし、昭和20年、英夫が「満蒙開拓青少年義勇兵」として15歳で満州に渡ることになる。岡山駅は、悲しみのつまった場所になってしまった。

戦争が庶民の暮らしに残した傷跡が、せつせつと浮かび上がってくる佳品である。

松浦 寿輝 一作品集選評より

馬場 友紀

「糸」

優秀賞

昭和19年、信子は倉敷の軍需工場で働いていた。「産めよ殖やせよ」の時代、20代半ばの信子は「嫁き遅れ」と言われ肩身の狭い日々を送っていた。そんなある日、仲人さんが縁談の話をもってきた。その写真を見て、信子はその男性にどこかで会ったことがある気がする。

身近な生活の細部に掘りどころを見出すことによって目の前の困難を乗り越える庶民のありさまは、コロナ禍の現在にもどこか相通じるように感じられる。

平松 洋子 一作品集選評より